

武蔵野日曜集会

言霊（一）

——ヨハネ伝第1章1～18節——

1996年1月21日

小池辰雄

言霊 即如 キリストの霊的存在 聖書の文句と一つになっている 聖書の文句を体受 私は
キリストと一つです 賤が誠は神ぞ知るらん である的存在 これは大変なひと キリストの
真者

【ヨハネ1:1～18】

1 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。2 この言は太初に神と
ともにあり、3 万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によら
で成りたるはなし。4 之に生命あり、この生命は人の光なりき。5 光は暗黒に
照る、而して暗黒は之を悟らざりき。6 神より遣された人いであり、その名を
ヨハネという。7 この人は証のために来れり、光に就きて証をなし、また凡
ての人の彼によりて信ぜん為なり。8 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に
来れるなり。

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10 彼は世にあり、
世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれは己の国にきたり
しに、己の民は之を受けざりき。12 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜ
し者には、神の子となる権をあたえ給えり。13 斯る人は血脈によらず、肉の
欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。14 言は肉体と
なりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄
光にして恩恵と真理とにて満てり。15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼ばわり
て言う『わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり』と、我
がかつていえるは此の人なり』16 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、
恩恵に恩恵を加えらる。17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とは
イエス・キリストによりて来れるなり。18 未だ神を見し者なし、ただ父の
懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

●言霊

1 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。



とある。この「言^{ことば}」というのはロゴスというギリシヤ語ですけども、これは非常に内容の深い言葉です。「言^{ことば}」という訳はちよつと平べつたくてだめなんで、私は

「元始^{はじめ}に言霊^{ことだま}あり」

と訳したい。「言^{ことば}」にはその本当の魂がある。これは大言海にも書いてあります。霊言^{れいげん}でもない。言^{ことば}というものは、その人の霊が入っている。キリストは

「わが言^{ことば}は霊なり、生命^{いのち}なり」

と言ったでしょ。キリストの言も霊であり生命である。我々の言葉も、言葉は単に意味内容を伝えるという普通の解釈ではだめなんです。

ゲーテは『ファウスト』の中で

「初めに行為あり」

と言った。

「行為に裏付けられない言葉は空しい」

という気持なんでしょうね。何かことをしてからものを言う。言ってからやるのではない。これは本当にそうです。黙って仕事をする。それから後で説明がいるなら言う。実は、行為そのものが本当は言葉なんです。一番素晴らしい言葉は、行為が表現しているところの何ものかです。

神光あれと言いたまなければ光ありき。（創世記1:2）

とある。あれは正に霊言なんです。「光あれ」という言は霊的な力をもった言葉だから「光ありき」となる。「わが言は霊なり、生命なり」とキリストが言われた事態はこの創世記の始めに出ているわけです。我々お互いの言葉もやはりそういった、空言でなくて実力をもったところの言葉でなくてはならない。これが

「元始^{はじめ}に霊言^{ロゴス}あり」

ということですよ。

「元始^{はじめ}に言霊あり、言霊は神と偕^{とも}にあり、言霊は神なりき。」

ということ。この霊言は神とともにある。いわゆる「言葉」だったら、「神とともに」という言い方はおかしいですね。何か具体的な存在なんだ。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真^{まこと}をもつてせよ」（ヨハネ4:24）

というキリストの言葉もありますが、正に霊なんです。霊の存在です。神の霊は魂の根元です。我々の魂も神・キリストの霊に連なっていなかったら空しいことになる。

●即如

だから、私は「信仰」という言葉は嫌いです。信じ仰いでいるのではない。これは神・キリストと交わっている世界、神交^{いこう}です。交わりというのは霊的には一如^{いちにょ}ということですよ。即如^{そくじょ}といつてもいい。「如^{ごとし}」というのは、「ごとし」という意味ではなく、「そのもの」とい



うことなんです。ドイツ語でいうと「アンズイッヒ（それ自体）」ということなんです。

「言霊は神なりき」

というのをいい加減に読んでほめてあげます。言霊は霊ですから、霊言だから、神的存在なんです。だから、「神なりき」という。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば生まれぬ先の父をしぞおもう」

という白隠の歌がある。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声をきく」

という。鳥はまつ黒だし、しかも闇の夜なんだ。鳴かぬ鳥の声が聞こえるかという。これは本当に霊的な深い世界ですね。「白隠」とは富士山のことです。山が白い雪で覆われて、雪に隠れている。だから白隠という。

●キリストの霊的存在

²この言は太初に神とともにあり、

³万の物これに由りて成り、

成りたる物に一つとして之によらで成りたるは

なし。

これは素晴らしい文語だ。この言霊は、後の方に出てきますけれども、キリストの霊的存在です。霊的存在としてのキリスト。それがやがてナザレのイエス・キリストとして現れた。言霊は、キリストの現世に現れる前の霊的存在なんです。このヨハネ伝の最初の方は不思議な言葉です。

「我はアブラハムより先に在りしなり」

とキリストは言つたでしょ。

「霊界に自分はいたんだ」

という。アブラハムやモーセよりも先にキリストは霊界に在った。それが顕れてきた。マリヤを通して現れてきた。マリヤはヨセフと結婚したけれども、ヨセフとの結婚の間にイエスができたのではない。聖霊の力でイエスが現れた。イエスは正に神の子であるわけです。霊界からマリヤを通して顕れてきた。だから、キリストというひとは全く例外的な存在なんです。神の子といわれるのにふさわしいひとです。そんなのは他にいない。全くただ一つの例外者です。だから、イエスの言葉はケタがちがう。いわゆるお説教ではない。

●聖書の文句と一つになっている

何々についてものを言っているうちはだめなんですよ。その対象と一つになっていることが告白的にならないと、本当の霊言ではない。

「……について」

ものを語るのはだめなんです。それは説明なんです。よく「何々について」という本がた



くさんあるね。ルッターも『クリスチャンの自由について』と言った。「について」なんて言ったのではだめだ、

「……を告白する」

のでなければ。我々は、聖書について語ったつてだめなんだ、聖書を自分の本として告白しないと。聖書と一つになっていないと。聖書の文句と根元的に一つになってなければ、聖書を本当に読んでいないのではない。聖書を読むというのはそういうことなのに、

「聖書読みの聖書知らず」

がたくさんいるわけだ。

「私は聖書を読んでいません、聖書の文句と一つになっているだけの話ですよ」というのが本当なんだ。

「この意味はどうだ」

なんて読んでいるのでは、いつまでたつても始まらない。

2 言霊は太初^{はじめ}に神とともにあり、3 万^{よろず}の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

という。この言霊は大変なものだ。万物を生成しているわけだ。言霊によってみな現象してくる。このヨハネ伝の最初の方はすごい。

●聖書の文句を体受

4 之に生命あり、この生命は人の光なりき。

これに霊的生命がある。

5 光は暗黒^{くらき}に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

気がつかない。光の何たるかがさっぱり分かっていない。

6 神より遣された人いであり、その名をヨハネという。

これは洗礼のヨハネです。

7 この人は証^{あかし}のために来り、光に就きて証^{あかし}をなし、

これも「就きて」とある。少し間接的な言い方だ。

また凡^{すべ}ての人の彼によりて信ぜん為なり。

私なら「信ずる」と言わない。

「体受する、体で受けとる、全存在で受けとる」

と言う。

「体受せんためなり」

ということですよ。

我々は聖書の文句を体受しなければだめです、身体で受けとらなければ。それで読んでいると、グーッと力がきて生命がくる。それが本当に聖書を読んでる人だ。聖書を読んで



力がきたり生命がきたりで、楽しくてしょうがない。そういう読みかたが本当の読みかたです。

「意味が分かりました」

なんていうのは、本当はひとつも分かってない。「聖書註解」だとか「聖書研究会」だとか、あんなのはみなだめです。皆さんは、註解書なんかひとつもいらぬ。直接に聖書の文句と一つになっていく。そうすると、

「力がきて光がきて。生命がきてしょうがない、ありがたくてしょうがない」

と。これが本当の読み方です。聖書よりも楽しい本はないわけです。他の本からはそんな力はこない。聖書を土台とした偉大な文学は、その文学を読んでいると、ある程度は力がかかりますよ、聖書を土台にしているから。ゲーテだとか、ミルトンだとか、ユゴーだとか、ああいう超一流の文人の書いたものはみな土台が聖書になっているからね。

●私はキリストと一つです

8 彼は光にあらず、光に就きて証^{あかし}せん為^{きた}に来れるなり。

「光に就きて証せん為に」なんて、聖書でもところどころ表現がまだるっこく感ずる。本当は「光を告白せん為に」なんだ。

9 もろもろの人をてらす真^{まこと}の光ありて、世にきたれり。

これは素晴らしい。霊の光、霊光なんだ。霊光が在って、世にやってきた。

10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。

これは大変なもんだ、キリストの預言です。キリストのことを言っているわけです。

11 かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

「己の国」といったって、いわゆる政治的な国ではない。私だったら、

「このひとは自分の本土にやってきた」

と訳す。「このひと」とはキリストの他には使わない。

ユダヤ人はキリストを受けとらない。

「モーセ、モーセ」

と言っていて、イエスを受けとらない。今でもユダヤ人はキリストを受けとらない。ユダヤ人はなかなか頑くなだから、頑固だから。

柔軟性のあるのは日本人だ。あまりあり過ぎたりして困るけれども。本当の柔軟性は根がしっかりしている。崖に生えている松の木はそうだ。あれは根がしっかりしている。ずいぶん海の風に吹かれるけれども、折れない。海辺の崖つぶちの松のようにならないとね。門松くらいではだめなんだ。松竹梅というけれども、松という木は素晴らしいものだ。

12 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。



これは素晴らしい。本当にそうなんだ。だから、我々は「神の子」なんだ。

「私はキリストと一つですよ」

とはつきり言わなければだめです。

「キリストを信じてます」

なんてではだめだ、「信じて」いるでは。

「私はキリストと一つです。相対的人間小池は躓いたり転んだりするけれども、私の一番深いところはキリストと一つです」

とはつきり言える。あなた方一人びとりはそれがはつきり言える。

「だけど、躓いたり転んだりするから、一つではありません」

なんて、そうではないよ。人間は躓いたり転んだりして一向差し支えない。

「ただ、一番深いところは一つです。これは本当の現実です」

と、それを皆さん一人びとりが言えなくてはだめなんだ。

● 賤が誠は神ぞ知るらん

人に何と言われようと、けなされようと誉められようと、そんなことは問題ではない。そういうことを言ったのは吉田松陰だ。彼は人の毀誉褒貶を問題にしない。松陰の言葉に、

「世の人はよしあしごとくもいはばいへ賤が誠は神ぞ知るらん」

神に知られ、神のみに知られていれば、それにて誠の平安あり、人の毀誉褒貶我に於て何かあらん、というわけです。また、

「自非讀萬卷之書安得為千秋人」

自非輕一己勞安得致兆民安」

(万巻の書を読むに非ざるよりはいつくんど千秋の人となるを得んや。

一己の勞を輕んずるに非ざるよりはいつくんど兆民の安きを致すを得んや)

という言葉もある。

人の毀誉褒貶なんか問題にしない。ただ、キリストだけには、

「よし、お前はそれでよろしい」

と、キリストに「よし」と言われたら、もう他は何もいらぬ。主さまに

「よし！」

と言われたら、人に何と言われようと、誉められようとけなされようと問題にしない。人に誉められて喜ぶようではだめだ。また、人にけなされて憤慨するようではだめなんだ。そんなものは問題でない。我々はそういうことにいよいよなっていきましょう。ゲートルが

「本ものは失われずして、後の世に残る。何と言われても一向差し支えない。ただ本ものであれ」

と言った。後世の歴史家がやがて証明する。



●である的存在

さつき讃美歌を歌ったときに、

「…ならん」

というところを

「…なり」

と断定的に皆さんは歌ってくださったね。あれは大変いい。「ならん」ではない。「なり」だ。我々の世界は「である」の世界で、「であろう」の世界ではない。

「…とならん」

なんていうのではだめなんだ。本当の神交の現実

「然り、である」

の世界です。

「であろう、でありたい」

ではだめなんだ。我々は、である的存在だ。

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

とキリストは言われた。祈ったことは必ず聞かれている。いや、祈ったこと以上にキリストは聞いていらつしやる。だから、祈るとありがたくてしょうがない。

「まことにありがとうございます」

と、平伏だけです。そういう実存にならなかつたらね。

それが本当の「エクジステンツ」(実存)というもののなんです。だから、あなた方とこうやって、しゃべったり聞いたりしていると楽しい。全部、告白的に聞いているし、告白的にもを言っているからね、説明しているのではないから。について、語っていない。「について、に関して」語っているうちはだめなんだ。そういう直接的な世界です。

●これは大変なひと

¹³斯^{しか}る人は血脈^{ちすじ}によらず、肉^{ねがい}の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。¹⁴言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子^{ひとりご}の栄光にして恩恵^{めぐみ}と真理^{まこと}にて満てり。

これは素晴らしいね。この「宿る」という字は「幕屋を張る」という字です。我らのあいだに幕屋を張った。この我々の身体のことを幕屋というんです。パウロがどこかで言っている「幕屋」が正に身体のことです。英語で「タバナクル」という。

「父の独子^{ひとりご}の栄光」

とある。キリストは栄光体だから、これを受けとらなければ。信じたつてだめだ、身体で受けとらなければ。我々は信仰という言葉はやめだ。我々はキリストを体受^{たいう}している。キリストを身体^{からだ}で受けとっています。



「恩恵と真理」

という言い方は時々でてくる。

15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼ばわりて言う『わが後にきたる者は我に勝れり、

これは当たり前だよ。

我より前にありし故なり」と、我がかつていえるは此の人なり』

「自分より前」どころではない。キリストは天界でアブラハムよりも先にいた。

正に「此の人」なんだ。キリストが訴えられた時にも、

「見よ、この人！」

と言われた。

「ごらん、この人だよ」

と。キリストの道は十字架道だ。十字架で殺されて、三日目に甦ってしまった。死にはしないんだ。霊体として甦れてきた。そして、弟子どもの所に、戸が閉まっているのにキリストは現れてきた。霊体だから自由自在だ。みなびつくりしてしまった。そしたらキリストは、

「私は幽霊ではない。食べるものがあれば食べるぞ」

と、お魚を食べた。あれは物語ではない。本当ですよ。

聖書、特に福音書——マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ——を読んで、キリストに圧倒されなければだめです。圧倒されて、

「参りました！」

と言うと、キリストと一つになる。キリストに圧倒されて読まなければだめです。

「これは大変なひとだ。降参しました！」

と。そうするとキリストは我々をつかまえて、我々一人びとりをキリストの中へ入れてしまふ。もの凄い力がくる。圧倒されて力がくる。滅ぼさない。

太陽の光を間接に見ていてはだめなんだ、太陽の光を全身に浴びなければ。それが本当の「ゾンネンキンツ」（太陽の子）だ。これはゲーテの言葉です。

私の魂は烈々火の如しだから、いずれこの地上を去る前にそういった火のような詩を書き残してサヨナラするつもりです。この日本はしょうがないから。情けないね、日本は精神的に一番危ない。いずれ書いたら、キリスト新聞社にでも、

「これを公にしろ」

と言おうか。私は自分で書いて、こんな小さな所でそのままにしておいたらしょうがないものね。大真理は日本中に響くようにしてもらわないともったいないから。今までキリスト新聞社とそういう交渉をしなかったのは、私はちよつとつかつだった。賀川さんが喜んでくれるよ。



●キリストの真者

16 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。18 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

キリストだけが本当に神の現象体である。そういう人が現れたんだと。あなた方一人ひとりがキリストの現象体になってくださいよ。

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言わなければ。なにも声を出して言う必要はないけれども、それだけの自信をもっていなければだめです。躓いたり転んだりしたっていいよ。けれども、本質はそうなんだ。それが本当の真者なんだ。いわゆる「信者」ではない。真の者だ。信じているのではない。キリストの真者だ。

どうだい、皆さん、楽しくないか。楽しくないような顔をしてたらだめだよ。私は楽しくてしょうがない。私は告白しているんです。人に何と言われようと、どう取り扱われようと一向差し支えありません。私はキリストと一つですから、何と言われようと一向差し支えない。

吉田松陰、佐久間象山、西郷南洲のような偉大な人物を相手にしていなければ。

「象山だとか、南洲だとかは私の友だちですよ」

と、あなた方一人ひとりが言えなくては。それはキリストをもっていれば、本当に言える。

「あれは先輩だけれども、魂の友だちですよ」

と。何も威張っているわけではない。本当の世界です。キリストをもっている人は一切をもつことができる。大変なひとだよ、イエスは。

あなた方一人ひとりとはキリストの証者だからね、その他の何ものでもない。そういう本質をもったのがこの武蔵野幕屋の兄弟姉妹たちです。そこらのとは違うんだ。

「そうです、その通りです!」

と言わないのかい(笑)。

「小池先生は一人でしゃべっているけれども……」

なんて、そうではないよ。あなた方も一緒にしゃべっている。

これが言霊の世界です。我々はキリストの言霊だ。キリスト自身が神の言霊だから。この「言霊」というのは素晴らしい言葉だね。ギリシヤ語の「ロゴス」よりかこの日本語の「言霊」の方が素晴らしい。

